



留学生生活をふりかえって

Jose de Jesus Avitia Segura*

1980年4月8日、20時間の長旅の末、ようやく小雨降る大阪国際空港に到着した私は、日本での留学生生活をここ大阪でスタートすることになりました。翌朝は快晴で、春のさわやかな風につられるまま近くの公園へ出かけて行ったのを覚えています。その美しい朝は私の日本での数々のすばらしいでき事の幕明けにふさわしいものでした。

メキシコの National Polytechnic Institute の学生の頃、港湾工学というものに興味をもち、卒業して就職した後も何とかして大学院で勉強したいと考えていた私は、日本の港湾技術者が世界的にも活躍していると聞き、日本の大使館を訪ねました。大使館では私の願いを快く聞き入れてくれ、ちょうどその頃メキシコでは、“Mexican Port System” のプロジェクトが計画されており、港湾技術者が必要とされていたこともあって、念願であった留学を許されたのです。しかし、文化や習慣のまったく違う日本への留学は、日本について勉強すればするほど不安がつるばかりでした。

けれどもそんな不安は、美しい日本の自然と親切な日本人に接することによって心の中から消え去ってしまいました。私が京都や奈良で見た、日本人の心と一体になった桜や寺社の美しさは、メキシコで読んだどのガイドブックにも十分には書かれていないものでした。

阪大の入学試験を受ける前に、私は大阪外大の日本語訓練コースに入講しました。日本に来る前から言葉の違いが大きな問題であることはわかっていましたが、それでも散髪屋で自分のしたいヘアスタイルを言えなかった時や、レストランで自分の食べたい物を食べられなかつ

た時など、絶望することはしばしばでした。でも今から考えれば、この必要性のおかげで日本語が上達したと言ってもいいと思います。この研修の間に、日本人はもちろん他のいろいろな国の人と友達になり、毎日が新鮮な驚きの連続でした。特に留学生会館から行った鳥取県の農家での Home Stay では、梨狩りだけでなく、生まれてはじめて“Pachnko”というゲームにも連れていってもらい、楽しい田舎での生活を体験することができました。

6カ月間の外大での研修を終え、日本語については不安を残したまま私は阪大へ移り、榎木教授率いる土木工学科海岸工学研究室に入りました。そして12月の入学試験に備えて勉強をはじめたのです。それと同時に大阪港の模型実験の手伝いをしましたが、これは研究のスタイルや実験の方法を知る上で大変役立ちました。そうこうしているうちに12月がやってきました。十分準備できないまま受験した私は、試験問題にはあまり答えられないばかりか、面接試験では恐い(?)教授の前で、日本語はおろか英語すらうまくしゃべれず、きんぎんなものでした。唯一うまくいったことと言えば、翌年再度受験のチャンスを与えてくれたことだけでした。

このように私の一回目の試験は失敗に終りはしたものの、この間にいろいろな勉強をすることができたし、日本語も上達して、私にとっては有意義な一年でした。そして2年目には何とか合格し、はれて大阪大学の学生となることができたのです。

これを機会に私は留学生会館を出て、アパートで一人暮らしをすることにしました。それは日本人の中で、日本人の一人として生活してみたかったからです。一日じゅう日本人に囲まれての生活は、不安というよりもむしろ楽しく、日本語が日々上達していくように感じられまし

*大阪大学大学院工学研究科前期課程、土木工学専攻、昭和59年3月修了、4月帰国

た。そのおかげで大学院の授業も徐々に理解できるようになり、日常生活にも困らなくなりました。この一人暮らしは私にとって大きくプラスになったと思っています。でも日本人の一人として生活しながらも“外人”の特権を生かしてスペイン語を教え、車を手に入れることができたのも事実なのですが……。

私の大学院での研究は港湾振動に関係するもので、計算機のプログラムと水理模型実験を並行して進めました。途中、プログラムがうまく行かなかったり、寒い冬の実験など、時には投げ出したくなることもありましたが、2年目の今年、“港内振動防止工法に関する研究”というテーマでなんとか修士論文をまとめることができました。これはもちろん私だけの力ではなく、榎木先生をはじめ研究室のみんなが私を元気づけ、親切に協力して下さったおかげだと感謝しています。

研究室のみんなで行った夏の“ゼミ旅行”も忘れることのできない思い出の一つです。最初の年は和歌山へ行き、民宿で3日間滞在しましたが、そのとき初めて食べた“Sashimi”は今では私の大好物になっています。2年目は日本海へ、3年目は神戸からヨットで和歌山まで行ったし、4年目は鳥取へ行きました。どれも楽しい思い出ばかりです。特にこのような先生と学生とのふれあいは、私の国では考えられないことで、とても素晴らしいと思います。

この4年の間に、関西はもちろん、沖縄、鳥取、和歌山、長野、東京、仙台など日本のいろいろな所を旅行し、初めて雪を見るなど日本の美しい自然に触れたこと、それにもまして日本人の心に触れたことは、私の留学生活に生活において研究と同じくらい有意義なものでした。

最後に、私が日本で体験した最も素晴らしい事を紹介させて下さい。私は昨年11月に日本人の女性と結婚したのです。彼女とは2年前、



写真 大阪天満宮にて

留学生会館のパーティで知り合い、スペイン語を教えてほしいとたのまれたのがきっかけでした。結婚式は榎木先生夫妻の仲人で、すべて日本式で行ないました。日本の着物を着せられた私は、顔こそ“外人”ではあるものの、すっかり日本人になってしまったような気がしました。4年間の日本人とのつきあいと日本の食べ物が私を日本人に変えてしまったのかもしれませんが。しかも変な日本語をしゃべる“外人の大阪人”に……。

そして私は今、日本を離れようとしています。やはり私の母国メキシコは私の最も愛する国なのです。でも私はそれと同じくらい日本を愛しています。近い将来、日本からいただいた奨学金を無駄にしないよう、我国の発展のために努力したいと思っています。

榎木教授はじめ研究室のみなさん、ありがとうございます。そして日本の皆様、本当にありがとうございます。またいつか日本に来る日を楽しみにしています。私の妻と、今妻のおなかの中にいる5カ月の子どもとともに……。

さようなら。